

目次

本シリーズ刊行にあたって iii

第1章 日本人英語学習者による冠詞の習得—概説— ニール・スネイプ	1
第2章 日本人英語学習者による指示表現と有生性の関連 —代名詞と名詞句の選択— 小川睦美	27
第3章 初級・中級レベルの 日本人英語学習者の文処理過程における言語情報の影響 須田孝司	61
第4章 第二言語習得における量子子拡張解釈の欠如 鈴木孝明	95
第5章 日本人英語学習者によるシュワー /ə/ の発音習得 —暗示的な発音指導の効果— 杉浦香織	117
第6章 L2音韻カテゴリーの構築過程における 音響的手がかりの利用と抑制 —日本語母語話者による英語摩擦音習得— 川崎貴子 ジョン・マシューズ 田中邦佳	163

第1章

日本人英語学習者による冠詞の習得

—概説—

ニール・スナイプ

(訳 須田孝司 須田織江)

1. はじめに

第二言語習得 (SLA) 研究が本格的に行われるようになったのは、1950年代以降であり、初期の SLA 研究における先駆者と言えば、対照分析仮説 (Contrastive Analysis Hypothesis: CAH) を提唱した Robert Lado (1957) であろう。CAH は、元々第二言語 (L2) において誤りが生じる理由を説明するために提案されたものであり、L2 を母語 (L1) と対照することで、L2 学習者が目標言語を使って話す際や文を書く際に、どのような誤りが起こるのか予測することができるようになった。つまり、CAH にもとづく、学習者は L1 と L2 の類似点に関しては容易に習得することができるが、相違点になると習得が困難になるということになる。学習者が L1 と大きく異なる L2 を習得することは難しいという CAH の推察は正しい一方で、L2 学習者のすべての誤りを CAH により説明できるわけではないことも明らかになった。

SLA 研究では、L1 の影響として冠詞の習得がよく議論されており、L1 に冠詞体系が存在する場合、英語の the や a といった冠詞の習得はそれほど難しくないことが様々な研究で提案されている (e.g., Trademan, 2002)。初期の冠詞の習得研究の多くは、L1 に冠詞を持たないモン語 (Huebner, 1985) や日本語 (Parrish, 1987; Shirahata, 1995) などの L2 学習者を対象としており、そのような学習者が冠詞を省略したり、誤って冠詞を使用することについて検

第2章

日本人英語学習者による 指示表現と有生性の関連

—代名詞と名詞句の選択—

小川睦美

1. はじめに

第二言語 (L2) 学習者の産出では、(1) の文における *dogs* のように指示対象 (**referent**) が同一の名詞句によって繰り返されることがある。

- (1) *Dogs can make us comfortable. Dogs are very cute! Whenever we see dogs, we are smile and happy. When we are sad, dogs approach me and sit next to me. It looks as if they say never mind!*

しかし、(1) の最後の文の *they* のように、指示対象が代名詞で言い換えられることもある。指示対象が二度以上繰り返される際、再び名詞句で指示するという過剰明示 (**over-explicitation**)¹ の現象は、習熟度レベルの比較的高い L2 学習者であっても見られる。本研究では、このような名詞句と代名詞の使い分けについて調査を行った。特に、指示対象の種類や数、一度談話に登場した対象が再び言及されるまでの指示距離 (**referential distance**) といった違いが、名詞句の繰り返しに関連しているのかを検証した。

1 over-explicitation という用語は、under-explicitation という語とともに、Hendriks (2003) によって使用されている。

第3章

初級・中級レベルの日本人英語学習者の 文処理過程における言語情報の影響

須田 孝司

1. はじめに

生成文法理論をもとにした第二言語習得 (SLA) 研究では、第二言語 (L2) 学習者が目標言語の文法素性 (**grammatical features**) を母語話者と同じように習得することができるかどうか、長い間議論が行われている (Hawkins, 2001; White, 2003)。この分野では、文法性判断タスク (**grammaticality judgment task**) や指向性タスク (**preference task**) など、紙と鉛筆を使い L2 学習者が特定の文に対して自分の判断を示すオフライン課題や、L2 学習者の自然発話や特定の発話が作り出されるように意図された誘発産出タスク (**elicited production task**) などにより集められた産出データにより、L2 学習者が持つ言語知識について研究が行われている。しかし、様々なタスクに対する反応をもとに、母語話者と L2 学習者の言語知識を比較しただけでは、L2 学習者の言語能力のある 1 つの側面を調べているに過ぎない。例えば、L2 学習者が母語話者より文の理解に長い時間が必要になったり、母語話者とは異なる反応を示す場合、それは学習者の言語知識の欠如が原因なのか、それとも学習者が母語話者とは異なる文処理方略を使っているからなのか、判断することはできない。つまり、SLA のメカニズムを解明するためには、L2 学習者が持っている言語知識について調査するだけでなく、どのような知識がどのような場面で使用されているのか、といった即時的な文処理過

第4章

第二言語習得における 量子子拡張解釈の欠如

鈴木孝明

1. はじめに

子どもの母語獲得において、多くの言語に共通して起こる誤りの1つに量子子拡張解釈 (quantifier spreading) がある¹。これは、典型的には次ページに示す図1のような絵と(1)に示すような実験文を使った真偽値判断法 (truth value judgment task) によって調査が行われてきた。

(1) Is every girl riding an elephant?

真偽値判断法とは、母語 (L1) 獲得研究では頻繁に用いられる実験方法の1つで、文解釈を調査する際に使われる。絵や物語によって特定の事実を提示し、実験文の内容がそれと合致するのかどうかを判断させる。図1の場合は、4頭のゾウがいて、その内の3頭には女の子が乗っているという事実が提示されている。これに関して(1)の質問を行う。被験者がこの質問文を正しく解釈していれば、(1)の答はYesとなるが、多くの子どもはNoと答え、

1 「量子子」という用語は quantifier の日本語訳である。「数量詞」あるいは「量化詞」という語を当てても本稿で意図するところは変わらないが、ここでは意味論におけるテクニカルタームとしてこの用語を採用した(荻原, 2016を参照)。また、同じ理由で、universal quantifier に「全称量子子」という用語を使うが、これは「普遍数量詞」や「普遍数量子」と同義である。

第5章

日本人英語学習者による シュワー /ə/ の発音習得

—暗示的な発音指導の効果—

杉浦香織

1. はじめに

英語のシュワーをご存知だろうか。シュワーとは、単語の弱い音節¹に生じ、低く、弱く、短く発音される音のことを言う。また、その音質（音色）は隣接する音に影響されるため、はっきりと決まっていない。それゆえ、「曖昧母音」とも言われる。内容語²であれば、例えば、**abroad** /əbrɔ:d/, **control** /kəntroʊl/, **medium** /mi:diəm/ の /ə/ の部分がシュワーである³。

なぜ、本稿では、弱々しく曖昧な音で、一見、それほど重要そうに見えないシュワーに注目するのか。その理由の1つは、シュワーは英語母語話者の発話において、出現頻度がとても高い母音だからである (Cruttenden, 2014)。さらにシュワーは、英語の明瞭性 (**intelligibility**)、つまり、発音の理解しやすさに影響を与えるリズムの産出に、重要な役割を果たしている

1 音節とは母音 (V) に子音 (C) が組み合わされて構成される音の単位である。最も基本的な音節構造は CV (例: go /gəʊ/) である。その他、C を伴わない V (例: oh /əʊ/) だけのものや、CVC (例: cat /kæt/) がある。

2 本研究では扱わないが、シュワーは冠詞などの機能語 (例: the /ðə/, a /ə/) にも生じる。それは、発話速度が速い場合やカジュアルな発話の場合が多い。

3 弱音節に生じる弱母音は主にシュワー /ə/ であるが、そのほかに、/i/, /ʌ/, /u/, /e/ も生じる (Wells, 2008)。本稿では、「シュワー」と「弱母音」の用語の混乱を避けるため、「弱母音」のことを、原則、「シュワー」という表現で統一する。

第6章

L2 音韻カテゴリーの構築過程における 音響的手がかりの利用と抑制

—日本語母語話者による英語摩擦音習得—

川崎貴子 ジョン・マシューズ 田中邦佳

1. はじめに

子どもは生後10–12ヶ月の間に母語(L1)の音韻システムに応じて、その言語の音声知覚システムを構築するとされる(Werker & Tees, 1984)。そしてL1の音声を聞く際には、言葉の意味を区別するのに必要とされる音響的な特徴に集中的に注意を払う。そして必要ない音響の手がかり(acoustic cue)には注意を払わないようになっていくのである。この確立されたL1の音韻システムが、第二言語(L2)の音声知覚において妨げとなることはよく知られている(Abramson & Lisker, 1970; Werker & Tees, 1984; Brown, 2000 他)。日本語母語話者が、英語の[l]と[l̥]の知覚に苦勞することは、広く知られている例である(Goto, 1971)。以下の表1-1, 1-2はそれぞれ英語、日本語の子音素¹をまとめたものである。

1 日本語の子音素については研究者により見解が分かるところである。表1-1, 1-2は牧野(2005, p. 52)による子音素を改編したものである。